ヤ ブ チ 式 土 器

琉球と奄美大島における文化交流の一証跡*

国分 直一・三島 格**

On the Yabuchi Type Pottery—An evidence showing the Cultural Intercourse between the Ryukyus and Amami-Oshimas

By

Naoichi KOKUBU and Itaru MISHIMA

There is a big cave on the small island, Yabuchi, off Katsuren peninsula on the eastern coast of Okinawa; it is 4.3 m deep and its cave entrance 19 m wide. In April, 1960, KOKUBU, one of the authors, and Mr. M. TAKEMOTO had a very lucky chance to excavate a trial pit at the cave. The culture of the upper layer is characterized by a dark red-brown coarse pottery with sand or crushed shell admixture, a reminiscent of south Ryukyuan Panari.

Accompanying finds were shell rings and one clam shell with chipped edge, obviously a shell knife. This find inventory represents the culture of a somewhat maritime orientation, plus milet cultivation with ancient techniques. The lower layer is characterized by very thin pottery of almost blackish colour with sand tempering and a finish.

The decoration consits of either irregular widely spaced vertical stripes or depressed marks extending over the outer surface of the vessel form. It appears to be an almost straight mouth jar or a jar with a mouth slightly curved outward. Accompanying finds were composed of a hammer stone with indentations on both upper and lower surfaces, a roughly shaped rectangular adze and a sinisterly finished broad hoe. Most remarkable amongst the find inventory was arrow points made of shell. Typologycally type A (elongated triangle), B (caulescent leaf-shape), and C (Triangle) are represented. One of the specimens is obvious imitation of metal arrow point. The above-mentioned thin pottery with the decoration consited of irregular impressed vertical stripes or depressed marks is very remarkable pottery which has never

* 水産大学校研究業績 第446号 1965年2月9日 受理
Contribution from the Shimonoseki University of Fisheries, No. 446
Received Feb. 9, 1965

** 熊本県荒尾中学校教諭

been found in the Ryukyus and other southern islands of Japan.

With regard to the pottery type from the Yabuchi cave we want to name it "the Yabuchi type pottery". This type pottery, however, was found from Yaya cave in Tsuchihama, Amami-Oshima, in 1963, three yers after the Yabuchi excavation. Professor M. NAGAI and I. Mishima, one of the authors, excavated this cave. The strata are divided into four layers; the surface layer, the first layer, the second layer and the bed rock. The Yabuchi type pottery was found from the first and second layers. According to the careful investigation, it seems probable that the site belongs to the later Jomon stage. Though the "Yabuchi type pottery" from the Yaya cave represents some slight variations compared with the Yabuchi pottery, these finds from the remote islands, Yabuchi and Amami-Oshima, seem to tell a clear cultural link between these islands.

I　序

1960年4月，国分は嵩元正秀氏（沖縄コザ中央高等学校）と沖縄ヤブチ洞窟において，本文で述るような新型式の土器の単純層を発掘し，周辺諸島において発見例のない土器として報告した[1]。1963年10月，永井昌文・三島格らは，鹿児島県奄美大島ヤーヤ洞窟遺跡を発掘し，従来南島において注意に上らなかった2・3種の土器を得た。その中の1つを凹文帯土器と分類し，同遺跡において顕著で今後注目を要する土器であると報告した[2]。その後，著者ら両名が両遺跡の土器を検討した結果，両者は胎土，焼成，施文，成形手法あるいは器形において，非常に類似性の強いものであることを確認したので，両島の先史文化の交流を示す新型式の土器と考え，新発見の土器を「ヤブチ式土器」と呼ぶことを提唱したい。両遺跡の立地状況，遺物の出土状況その他遺物の詳細についてはそれぞれの報告にゆづりたい。

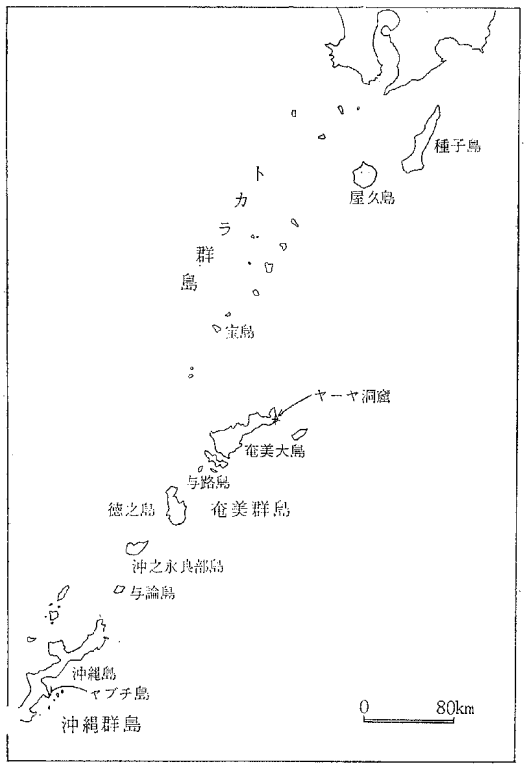


Fig. 1. Islands of Okinawa and Amami. Arrow marks show the locations of Yabuchi and Yaya.

II　新型式の土器

両遺跡における新型式の土器について説明する。

ヤブチ洞窟で得られた約100余片の土器はいずれも小片で肩部から胴腹部にかけての破片が多く，その器形は甕型ないし深鉢型の器形と考えられるが，接合によって全形を復原することはできなかった。土器片の表裏には石灰質分の膠着が多い。口縁部片は5個体分あるが，すべて短い口唇部か，わずかに外反する直口である(Pl. III, Figs. 1-5)。底部片を欠くので，その形状は不明であるが，平底と推定し，胴腹部の張りの少ない器形を想定する。胴腹部における施文は押圧による凹文帯を基調とするもので，口縁部にあっては Pl. II, Figs. 1, 5 のごとく外反部に斜行の凹文を列点状につけるものが2例ある。胴腹部にかけては，縦位の凹文

や短彫の凹文を横位に並列し，その上を器面調整を行なっている(Pls. Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ)。施文範囲は底部に及ぶものか否かは明らかでない。土器裏面には製作過程を示す指頭の圧痕（Pl. Ⅱ, Figs. 1, 4, 7, 8）が認められるが，中には（Pl. Ⅱ, Figs. 2, 3, 9）のごとく指頭様の圧痕のおびただしい並列の認められるものもある。後者は意識的な並列と考えられる。

土器製作法は輪積み法か，巻き上げ法かのいずれかであろう。胎土は密であるが，砂粒の他に微少の石英粒を含む。貝殻片の混入は認められない。焼成は概ね硬く，色調は黄褐色，赤褐色ないし暗褐色を呈するが，裏面は黒色を呈するものがある。さらに，この土器の成形についての共通の特色は，器壁の非常に薄い点で，概ね 4 mm ないし 5 mm 程度である。

ヤーヤ洞窟で得られた相当量の資料もすべて小片で，石灰質分の膠着が多い。器形は甕型ないしは深鉢型の器形と推定され，胴腹部はあまり張らないものと考えられる。しかし接合によって器形の復原にできなかった。口縁部の形状は直口（Pl. Ⅴ, Fig. 5）の他に山形の小突起をもつもの 1 例がある（Pl. Ⅳ, Figs. 1-4；Pl. Ⅴ, Fig. 5）底部を欠くが平底であろうと推定する。施文はヤブチ洞窟の施文と全く同一（Pls. Ⅳ, Ⅴ, Ⅵ）のものが多いが，中にはその変化と認められるものがある。即ち，（1）凹文の片側を箆状の用具で薄くそぎ取る（Pl. Ⅳ, Fig. 1-1）（2）凹文帯の上に縦措の刻線を加える（Pl. Ⅳ, Fig. 1-4）（3）凹文は微弱化しているが，縦描きの刻線は明瞭なものがある（Pl. Ⅳ, Fig. 2-5, Pl. Ⅵ, Fig. 3)。この変化過程は凹文→凹文＋そぎ取り刻線→刻線のごとく展開するものであろうか。いずれも，器面調整を施している。山形口縁にあっては，口唇部に列点状の小圧痕をもつが，(Pl. Ⅴ, Fig. 3, Pl. Ⅵ, Fig. 15）この手法はヤブチ洞窟の例にも認められるところである。裏面には成形時の手指の圧痕があるが，前記のごとく，びっしりと並列したものは今の所発見されていない。胎土はヤブチ洞窟の土器と同じで，焼成は比較的硬く，色調は淡黄ないし淡褐色を示すが，赤褐色を呈するものが 1 片ある。器壁は薄手のものもあるが，やや厚いものもある。

以上を要約すると，ヤブチの土器の施文は押圧による凹文を施文の基調とする土器で，その器形は口縁部において，直口かもしくは山形の小突起を有する比較的胴腹部の張りの少ない，かつ器壁の薄手の甕形ないしは深鉢形の土器といえる。また器壁裏面の手指痕や同形状に似た圧痕も顕著である。これらヤブチの凹文土器をヤーヤの凹文土器に混ぜしめると，いずれが，どの遺跡に属するものか迷うほどの類似を示す。現在の所見では，上記 2 遺跡のみの発見であるが，今後他にも発見の可能性はあると考える。

Ⅲ　遺物の出土状況・伴出遺物

ヤブチ洞窟は沖縄本島の東部海岸の勝連半島からわずかに離れた小島，ヤブチ（籔地）島にある。奥行き 4.3m，入口の幅 19m。洞奥には小祠が祀られている。1 m × 2 m の試掘トレンチを掘った結果，次表の如き12層の層序が認められた（Fig. 2（次頁）参照)。

文化層は表示のごとく，第Ⅲ～Ⅴ層の無遺物層によって截然と上の上下 2 層にわかれている。上層（第Ⅱ層）の文化は胎土に砂または貝の砕片を混じた，暗赤褐色の無文の土器で示される文化で，器壁面には擦痕をとどめるものもある。胎土の観察によれば，南琉球のパナリ焼系統の土器に似るが，焼成はやや硬い。器形を明らかに示す大破片はないが，やや外反する短い口縁をもつ壺形の器形が含まれると見られる。伴出遺物は網の錘に使用したと見られる貝輪（1 例はヒレジャコ製 Pl. Ⅶ）とハマグリの貝縁に打ち欠きを加えた貝製ナイフと思われるもの(Pl. Ⅷ)が 1 例ある。この上層文化は明らかに海辺の漁撈生活となんらかの穂摘みを行なう農業の存在を暗示する。後者は恐らく粟作と関係があるであろう。この文化の年代は判然としないが，海辺に進出して網漁撈が行なわれるに至った時期と考える。下層の文化は前述の琉球先史時代に未だ登場しない土器文化で，伴出遺物は上下両面に凹みをもつハンマーストーン，粗造の方角の adze (rectangular adze)，広い石鍬かと見られる石器（Pl. Ⅸ, Fig. 2-1）および貝製鏃である（Pl. Ⅸ, Fig. 1)。このうち，貝製の鏃はもっとも注目すべきもので，長目の三角形（A式），と長葉状の形式（B式），および有茎の形式

第1表　ヤブチ試掘トレンチの層序と出土遺物

	層　序	遺　物
Ⅰ	珊瑚礁の砕片を人為的に埋めた層　厚さ約10 cm	
Ⅱ	黝色土層（遺物包含層　厚さ約30 cm）	無文土器　貝錘　貝刀
Ⅲ	珊瑚礁の礫塊層　人工的配置と思われる　厚さ約10～20 cm	無遺物層
Ⅳ	暗褐色土層　（Ⅳ層，Ⅴ層を通しての厚さ約25～35 cm）	無遺物層
Ⅴ	仝上　但しやや暗色弱し	仝上
Ⅵ	第Ⅴ層中に包含される灰層	無遺物層
Ⅶ	第Ⅴ層直下の灰層	仝上
Ⅷ	赤褐色土層（遺物包含層　約28～50 cm）	凹文土器（ヤブチ式土器），石器，貝鏃
Ⅸ Ⅹ Ⅺ	第Ⅷ層中に挾在する間層　Ⅸは黝褐，Ⅹは褐色　Ⅺは黝色を呈する	無遺物層

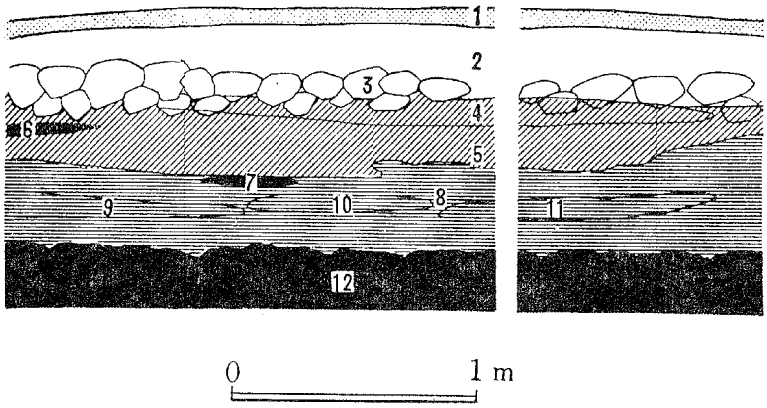


Fig. 2. Stratification of Yabuchi trial trench.
1. Artificial floor of efflorescent coral ; 2. Culture containing layer of blackish earth (dark red brown pottery with sand and crushed shell admixture) ; 3. Second artificial floor consisting of coral stones ; 4—5. Earth layer of reddish-brown or dark brown colour ; 6. Whitish soil ; 7. Ash ; 8. Reddish brown soil layer (Thin pottery fragments) ; 9. Soil colour : blackish-brown ; 10. Soil colour : brown ; 11. Soil colour : blackish ; 12. Coral mother rock.

（C式）の3型式に分類される。C式には金属器の影響を思わせるものがある。A式は沖縄以外において比較的広く見出せるものであるが，B式に属するものは，華南および台湾南部の一部遺跡に見出されている。沖縄においてはB式は骨製の鏃として若干の先史遺跡に登場している[5]。B式の石鏃は日本においては北九州にもわずかに見られ，海峡を超えると，朝鮮半島にも発見されている[6]。これらは南九州，種子島，および奄美大島には発見されていない。従って，その分布は九州よりする南進によって出現したとは考え難い。

むしろ華南を発現地とすることを暗示すると考える。

現在の段階において，ヤブチ下層文化によって代表される文化を南島文化のクロノロジカルなわくの中にはめこむことも，また島外文化との関係を決定することも，早急に過ぎると思われる。しかし，今後追跡を必要とする文化である。ことに如何にして発現するに至ったかは興味深い問題である。

ヤーヤ洞窟遺跡（鹿児島県大島郡笠利町土浜ヤーヤ）は海浜から約 300 m の石灰岩質の隆起段丘が侵蝕された洞窟にいとなまれた住居址と推定される。長さ約 12 m，奥行き 4 m，高さ 4 m の不整形の岩陰を形成している。側壁に直角に長さ 3 m，幅 1 mのトレンチを掘った結果，第２表のごとき層序を確認した(Fig. 3 参照)。

第２表　ヤーヤ洞窟の試掘トレンチの層序と出土遺物

	層　　序	遺　　物
表層	淡褐色粘土層　厚さ5〜10 cm	風葬人骨片木棺片・スイジガイ
Ⅰ	淡褐色粘土層　厚さ15〜30 cm	沈線文土器，条痕文土器，無文土器，凹文土器（ヤブチ式土器）貝斧，貝製匙，石斧
Ⅱ	淡褐色粘土層　厚さ20〜50 cm	沈線文土器，刺突文土器，刺突沈線瓜形文土器，凹文土器（ヤブチ式土器）石弾，板状石製品，貝製腕輪，貝製垂飾，貝錘，貝斧
Ⅲ	石灰岩質母岩	

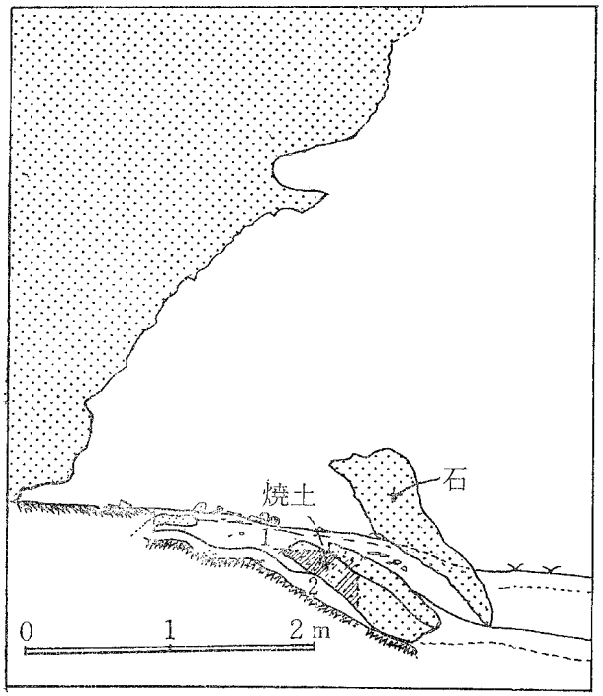


Fig. 3. Stratification of Yaya trial trench.
1. First layer : Soft clay of light brown colour (potsherds with scratched marks, depressed marks and sunken relief marks) 2. Second layer : Light blackish-brown clay layer above bed rock (potsherds with rich variation of decoration).

先史文化層は表示するごとく，第Ⅰ～Ⅱ層に認められ，既述の新型式の土器は第Ⅰ～Ⅱ層を通して出土している。本遺跡にあって顕著な土器といえる。伴出の石器や貝製品は琉球から薩南諸島に至る南島諸遺跡において認められるものが多く，貝製品の貝種も南海産の貝である。本遺跡の年代の編年上の詳細なる位置については，後日にゆづるが，縄文時代の後期に比定されるものと考える。この編年は年代を判定する資料に欠けるヤブチ洞窟遺跡の編年的位置を考える上に役立つといえよう。

Ⅳ 結　　語

ヤブチ，ヤーヤ両遺跡における新型式の土器の出現は相互に無関係に発生したとは考え難いと思う。とするなら両島間の交渉の存在を想定せざるを得ない。今後，周辺諸島における発見例が増加するなら，相互の交渉関係の状況はさらに明瞭になると考える。

沖縄本島，徳之島，奄美大美などにおける先史文化上の様相が相互に類似していることは従来から指摘されてきたが，それは貝器，貝製装飾品，石器などにおいて特に注目されてきた所であるが，土器に関しては，端的に全く共通の事例が発見されることはきわめて稀であったので，ヤブチ式土器のヤブチ，奄美大島両島における発見の意義は大きいと考える。

つぎに，その両島における登場が無関係でないとするなら，それらの先後関係が問題になる。この問題を解決するためには現在の段階では資料不十分であるが，現在の限られた資料の上に立つ時，ヤブチにおける出現はヤーヤにおける出現に先行するのでなかろうかと考える。その根拠はヤーヤにおいては施文のし方においてヤブチのそれに比して，やや変化が現われていることによる。

文　　献

1）KOKUBU, N. and E. KANEKO, 1960；*Ryuku Survey Asian Perspectives* Ⅵ.
2）永井昌文・三島　格，1964：奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報　考古学雑誌，**50**（2）.
3）* 浙江省文物管理委員会・浙江博物館，1958：浙江新石器時代文物図録.
4）新田重清・嵩元政秀，1960：嘉手納貝塚発掘報告書　琉球文化財要覧.
5）文化財保護委員会，1956：支登支石墓群.
6）藤田良策，1948：朝鮮の石器時代，朝鮮考古学研究.

*浙江新石器時代文物図録中に登場するB式石鏃および台湾南部に発見されるB式石鏃について。仝上図録中，B式石鏃は華南銭山漾，老和山，衢縣，永嘉等に見出される。台湾南部においては大湖貝塚（高雄縣）に発見されている。

追記：以上の報文を書いた後，筆者の中の1人国分は奄美大島ヤーヤ洞窟遺跡を訪れる機会をもった。1965年1月14日，ヤーヤ洞窟地区の未着手地点において，タケノコガイの両側を砥磨して殻軸を露出させた貝器（垂飾と考えられる），イモガイの殻頂部を截断して，作製した小珠，貝斧（ヤコウガイの蓋を利用せるもの）および剝片状の石器が刺突沈線爪形文土器片と共に採集された。付記しておく。

PLATE

PLATE I

Potsherds with depressed marks from the lower cultural layer of Yabuchi cave.

PLATE I

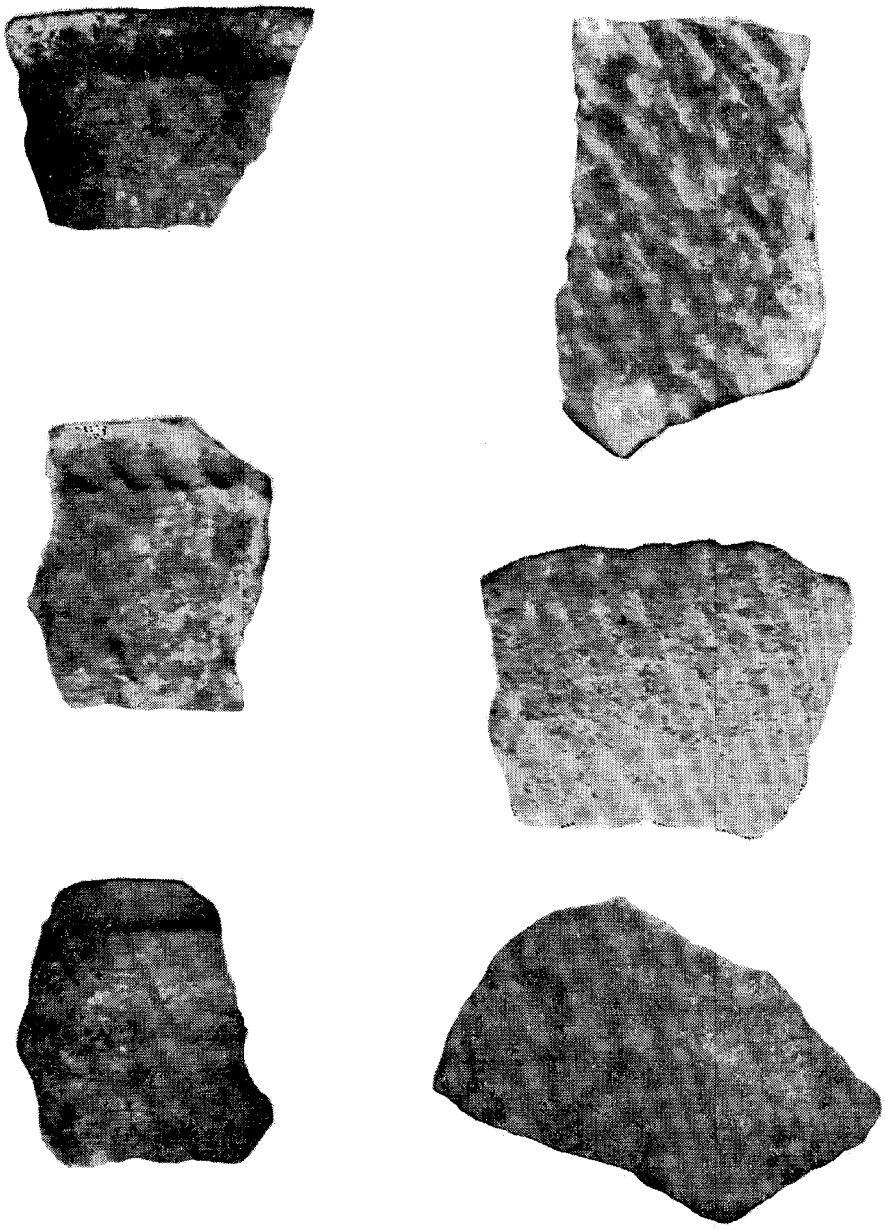
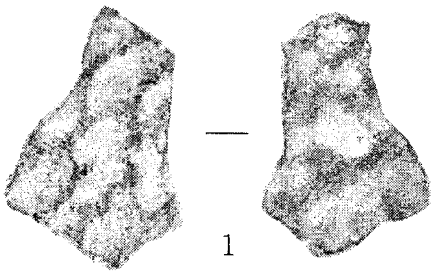
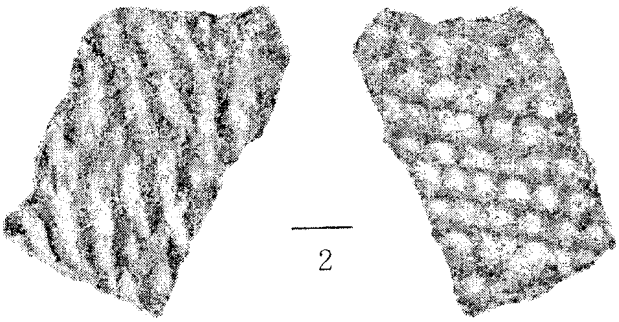


PLATE II

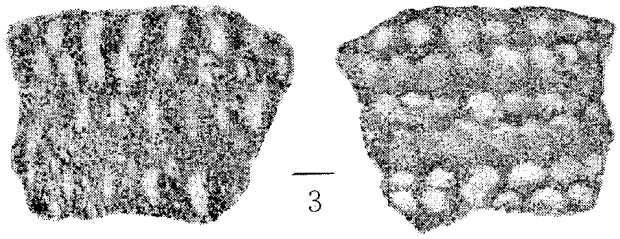
Rubbings of potsherds with depressed marks from the lower cultural layer of Yabuchi cave. The inner surfaces are covered with finger prints.



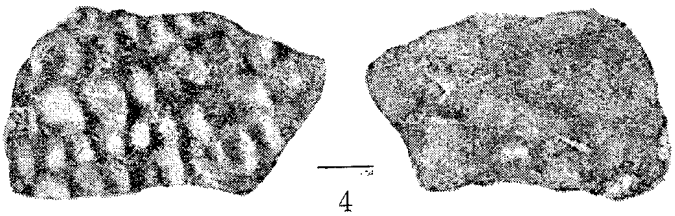
1



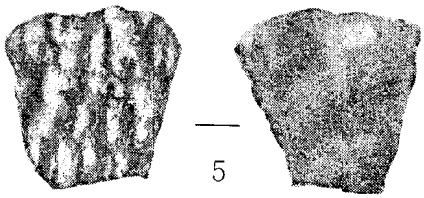
2



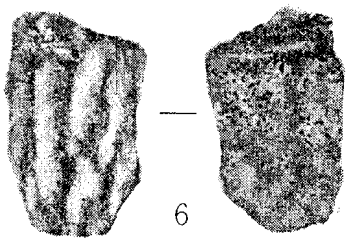
3



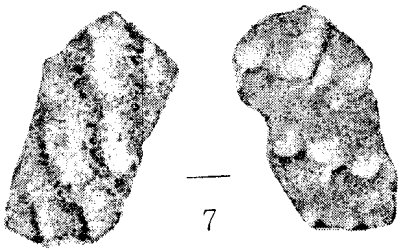
4



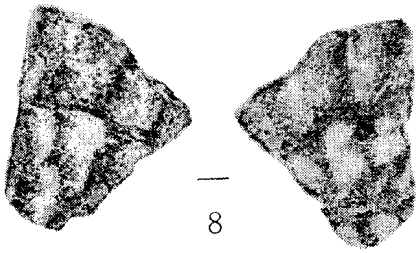
5



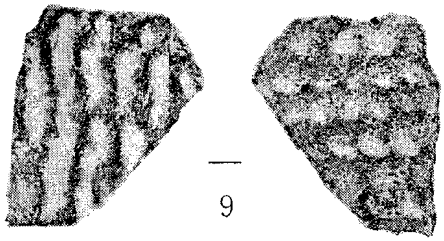
6



7



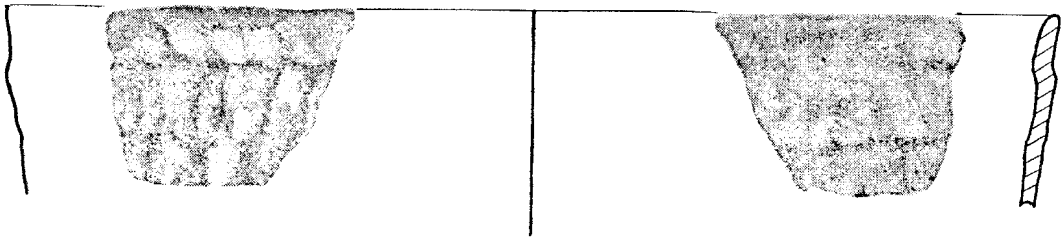
8



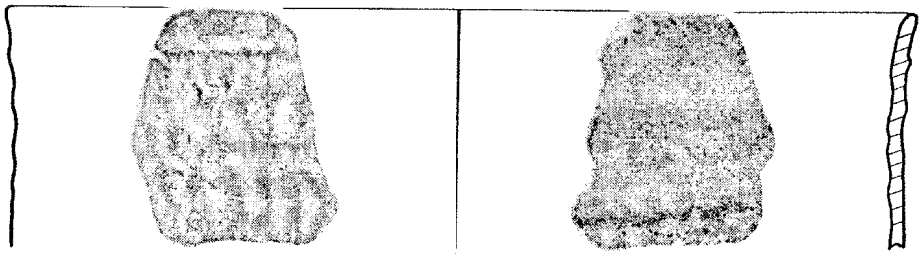
9

PLATE Ⅲ

Vessels with depressed marks reconstructed (Lower cultural layer of Yabuchi cave).



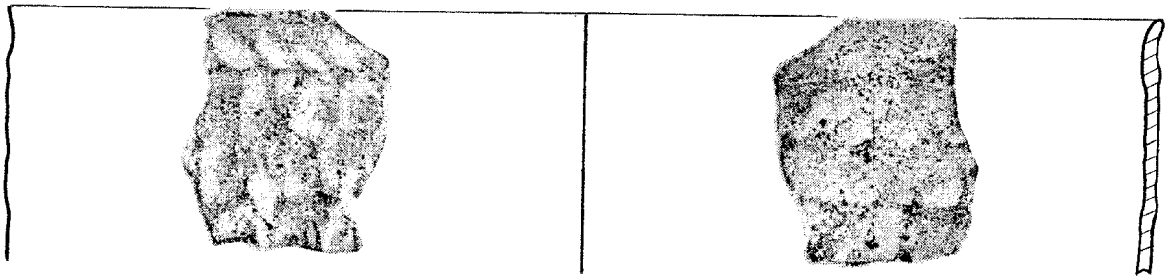
1



2

3

4



5

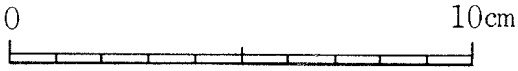
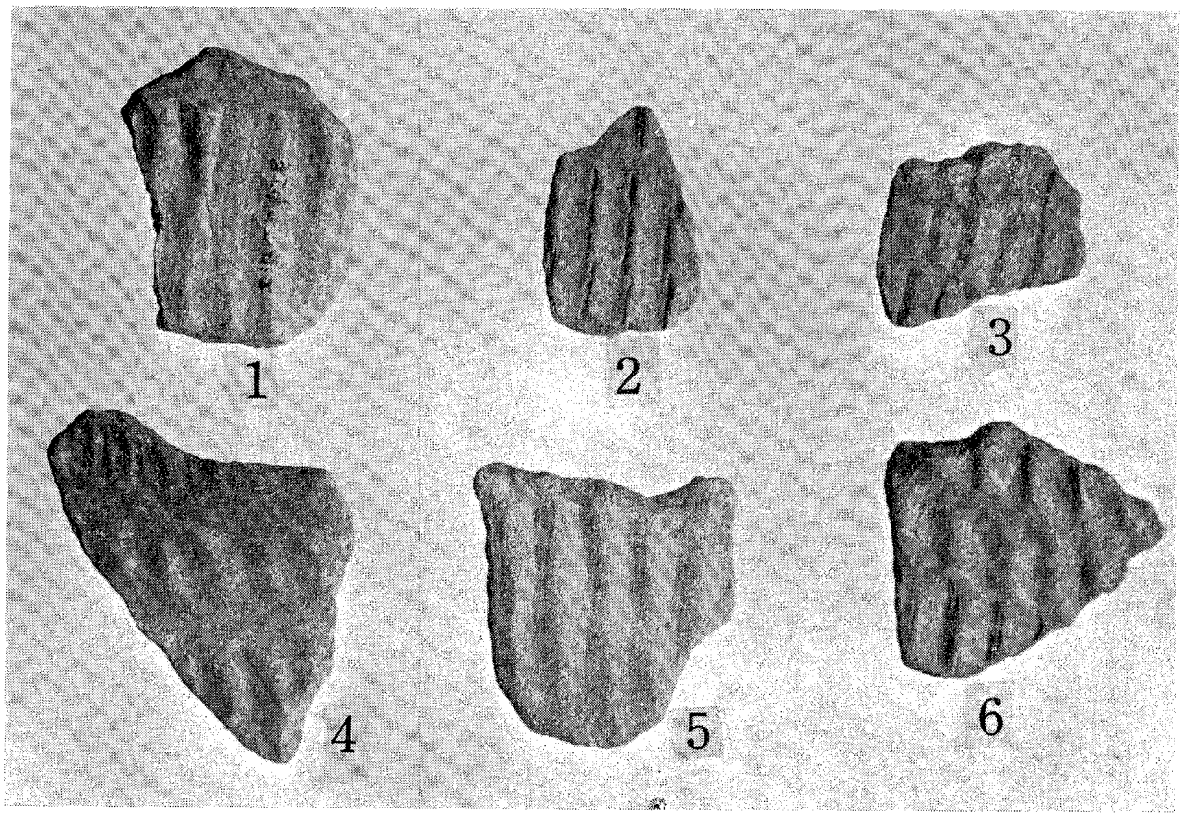
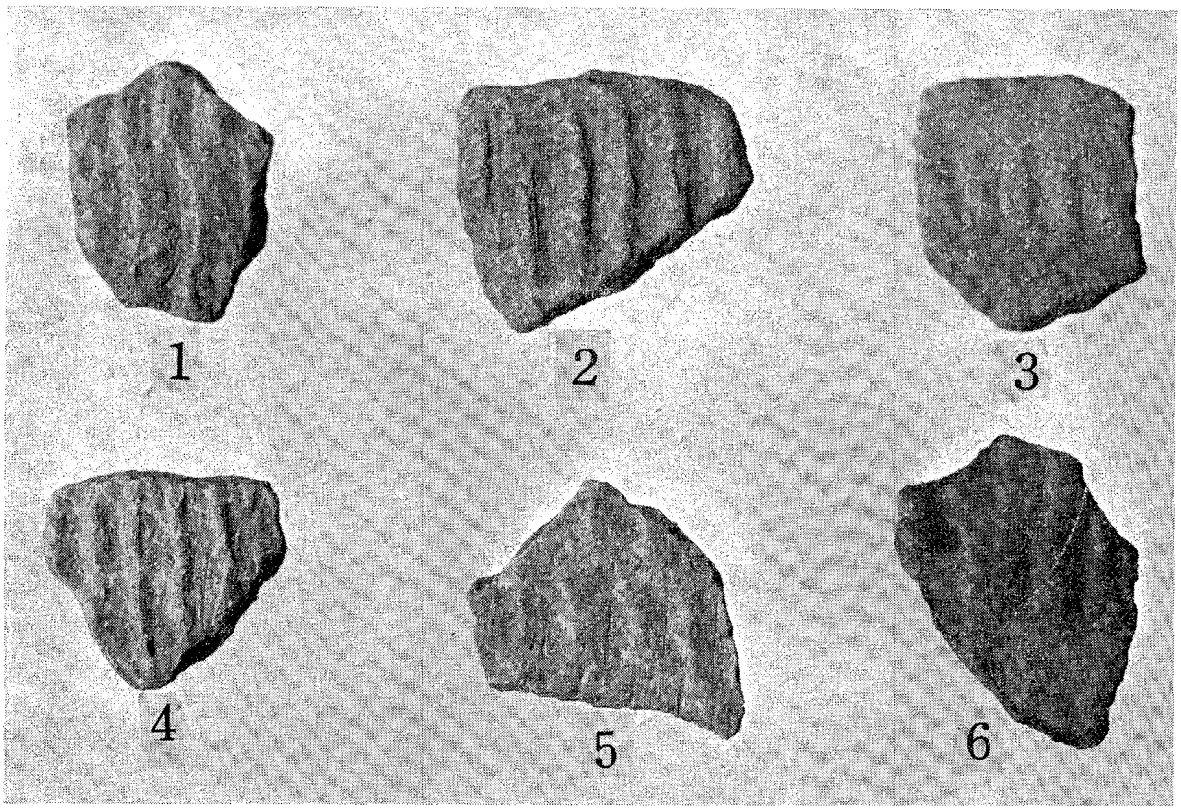


PLATE IV

Potsherds with depressed marks from Yaya cave.



1



2

PLATE V

Rubbings of potsherds from the first layer of Yaya cave.

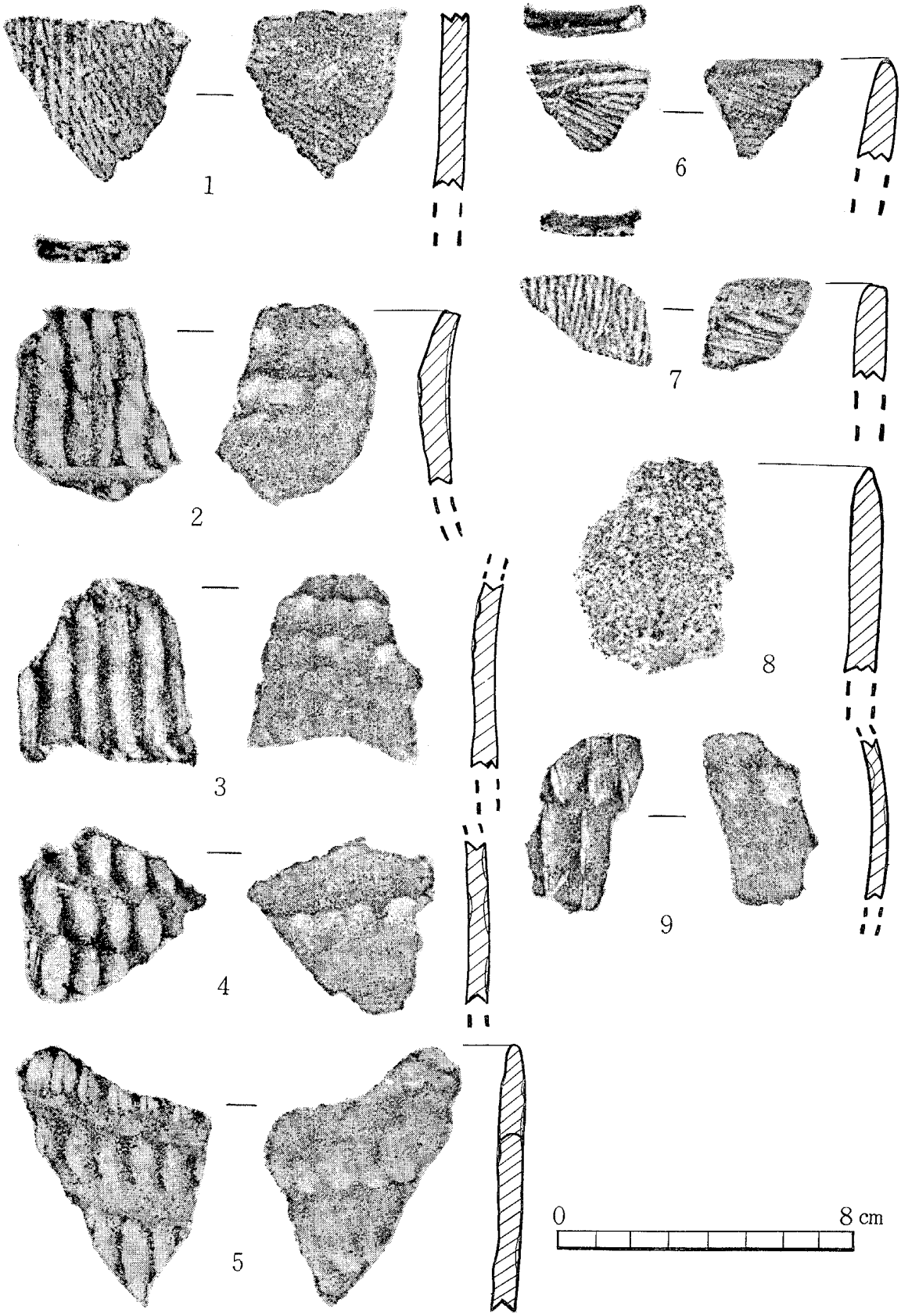

1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
8 cm

PLATE VI

Rubbings of potsherds from the second layer of Yaya cave.

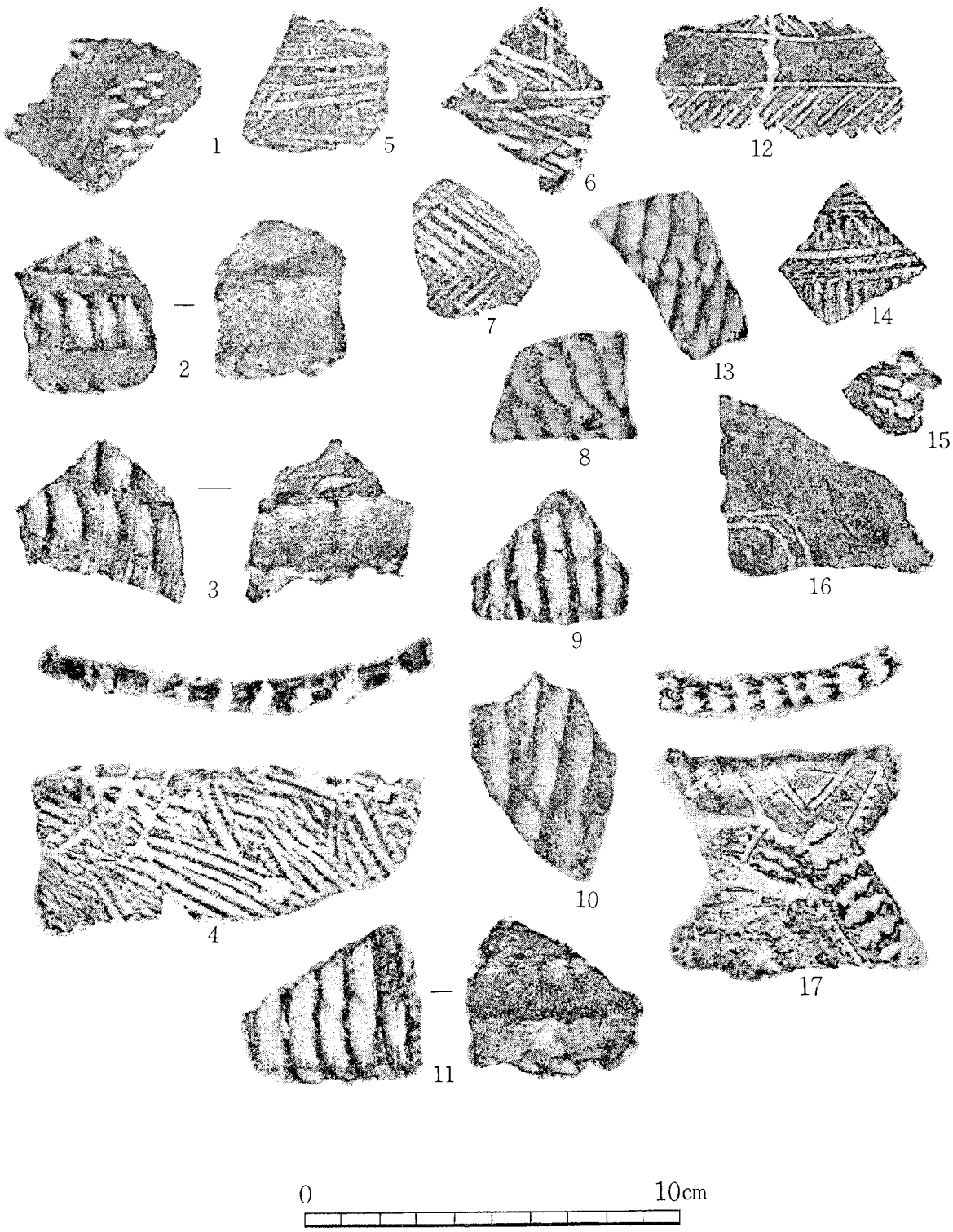
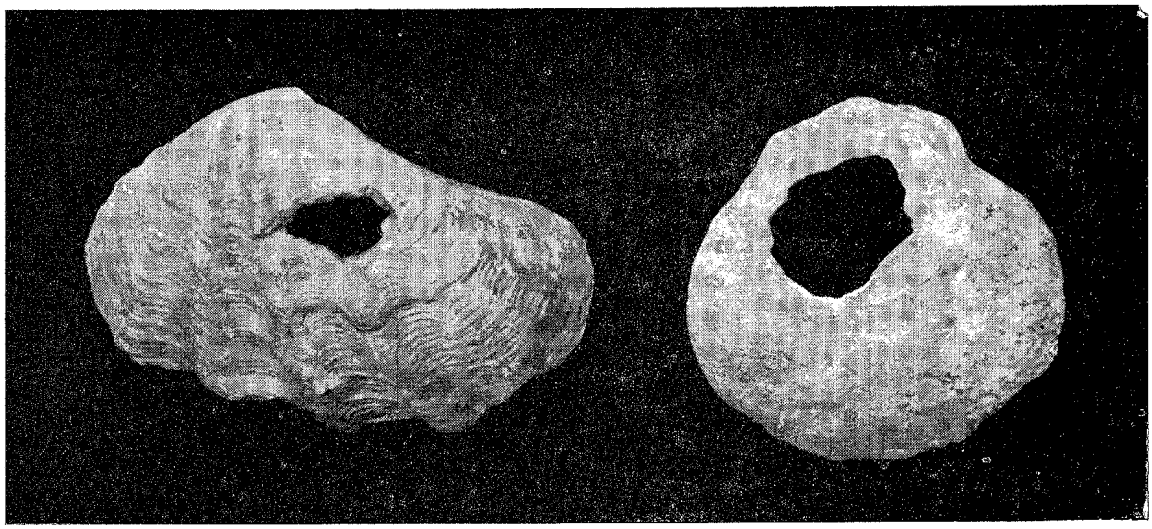

1
5
6
12
7
13
14
2
8
15
3
16
9
10
4
17
11
0
10cm

PLATE VII

Shell rings from the upper cultural layer of Yabuchi cave.

1. Exterior view 2. Interior view



0 5 cm

1

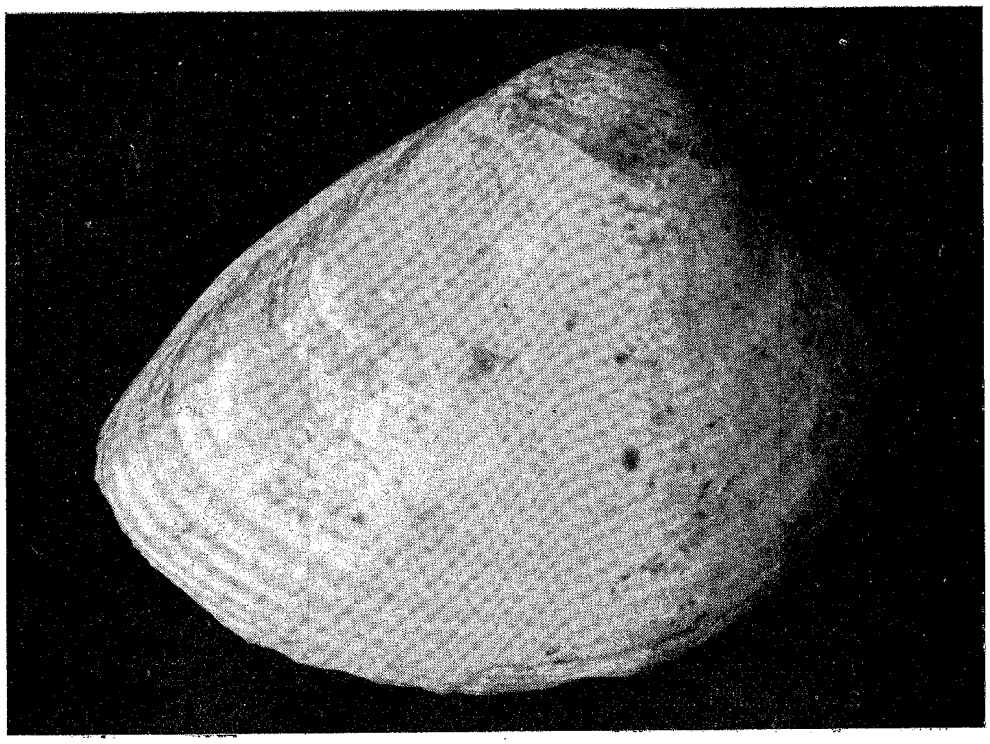
0 5 cm

2

PLATE VII

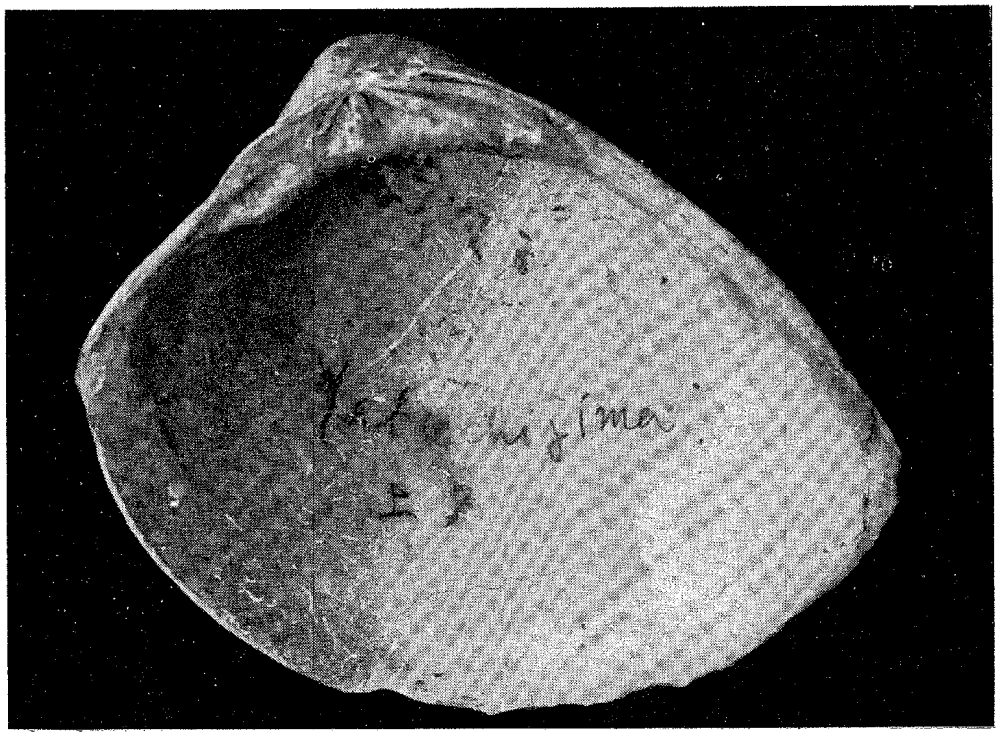
Shell knife from the upper cultural layer of Yabuchi cave.

1. Exterior view 2. Interior view



0 5 cm

1



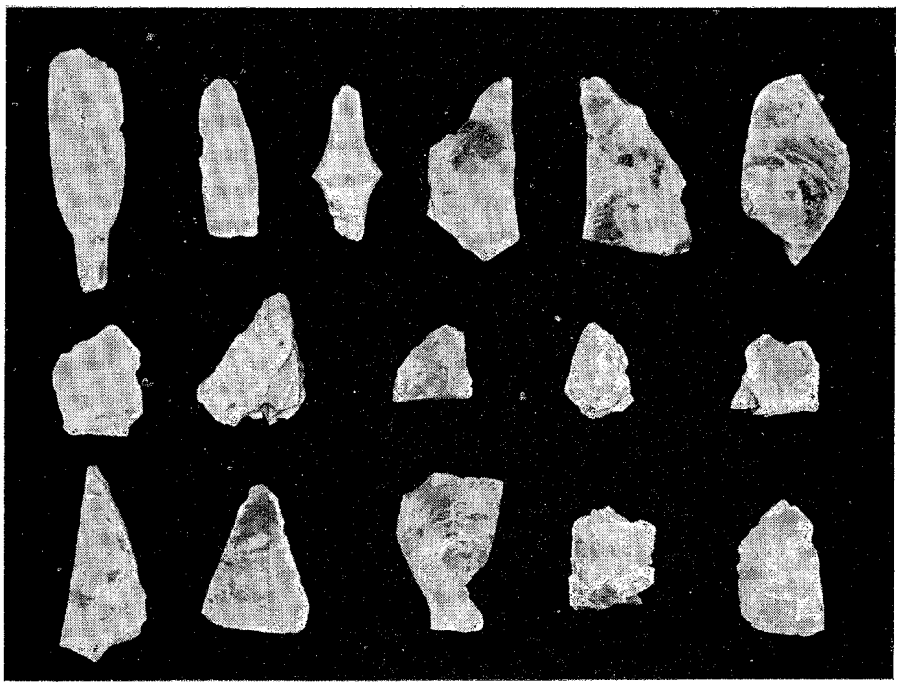
0 5 cm

2

PLATE IX

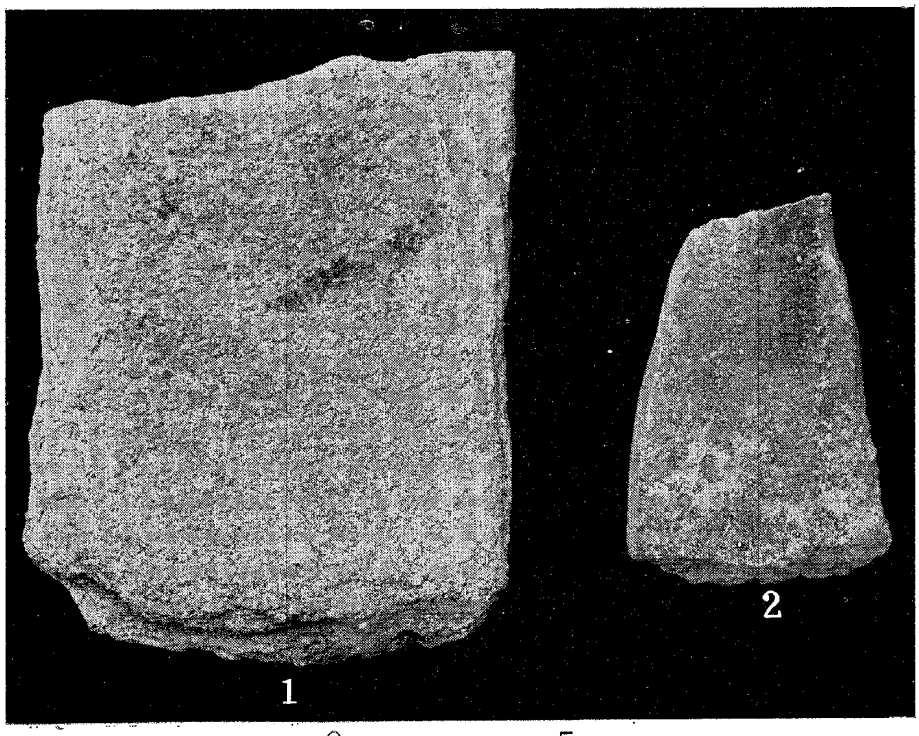
Artifacts from the lower cultural ayer of Yabuchi cave.

1. Shell arrow points from the lower cultural layer of Yabuchi cave
2. Stone implements ibid



0 5 cm

1



0 5 cm

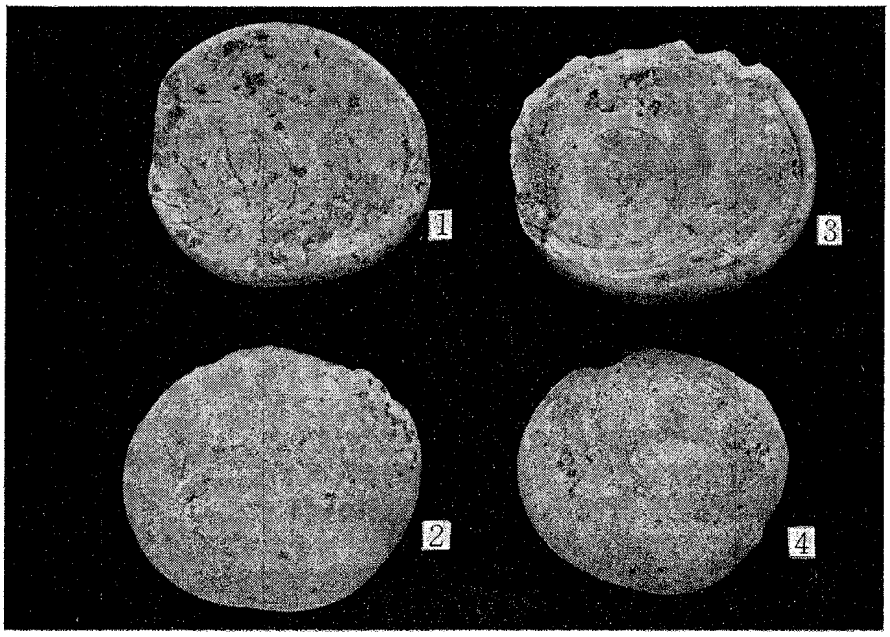
2

PLATE X

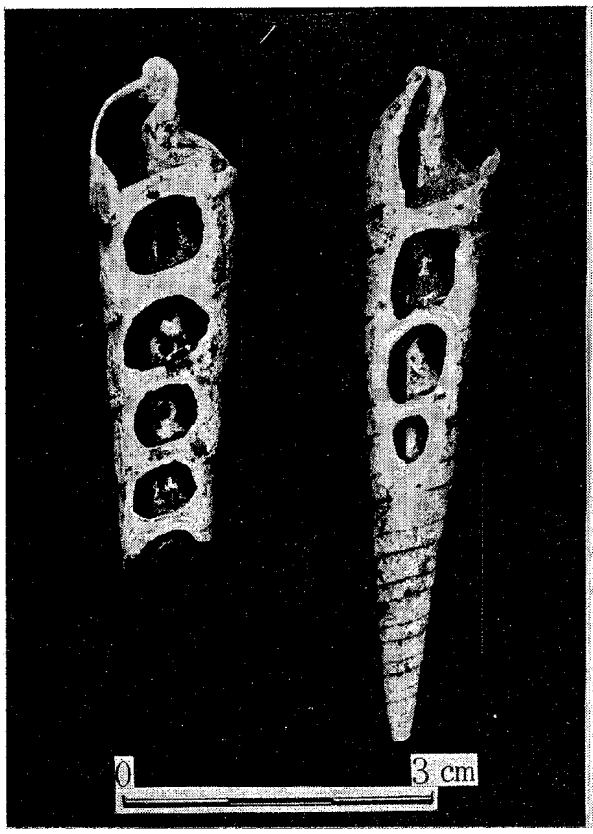
Artifacts from Yaya cave.

1. Sinkers and axes in shell from the first and second layers
   1,4. Shell sinkers 2,3. shell axes (1,3 Interior view 2,4 Exterior view)
2. Shell pendants
3. Stone axe

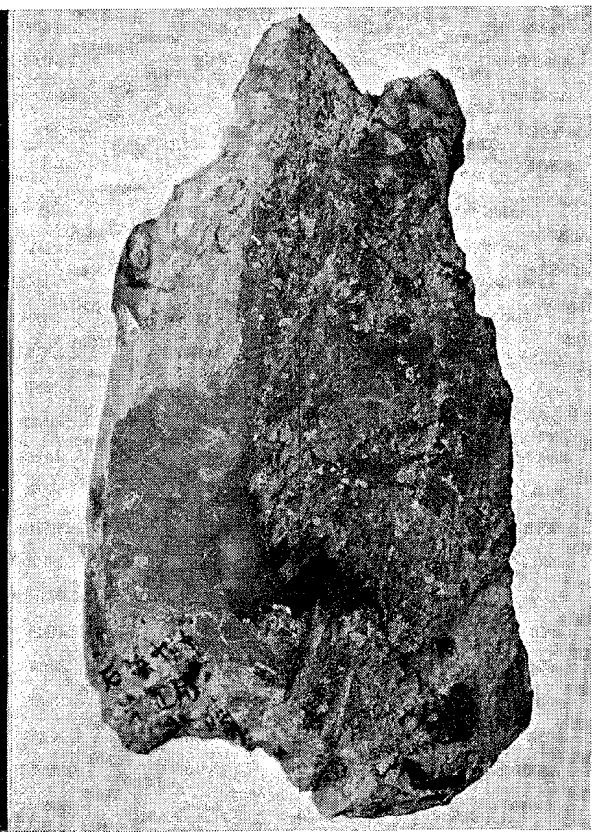
PLATE X



1



2



3